

高田城



1 三重櫓

高田城のシンボルであった櫓。発掘調査や江戸時代の古文書や絵図を参考に、平成5年(1993)に復元したものです。櫓の高さは14.5m、屋根に葺いた瓦は24,380枚にもなります。築城時は二重櫓でしたが、高田藩の最盛期となった松平光長の時に三重櫓に改築されました。

3 本丸の土塁と内堀

徳川一門の城にふさわしく、本丸の曲輪は全国でも群を抜いて大きかった高田城。その土塁も、総延長約1km、高さ約10mと雄大なものです。藩主の居所であり政治をつかさどった本丸御殿は明治3年(1870)の火災で焼失しましたが、往時の威容は歴史博物館のジオラマとバーチャルリアリティで再現しています。



高田城は、慶長19年(1614)に、徳川幕府による国家事業である「天下普請」として築かれ、徳川家康の六男である松平忠輝を城主に据えました。

築城工事には家康の命で、加賀藩主前田利常や、もと春日山城主であった米沢藩主上杉景勝など13の有力大名が割り当てられ、忠輝の義父である仙台藩主伊達政宗が、普請総裁として自ら陣頭指揮をとりました。その結果、わずか4か月足らずで越後一国と北信濃までの一部をも治める巨大城郭が誕生したのです。

高田城には、石垣や天守閣がありませんでした。これはこの城が戦や権威の象徴ではなく、北国街道上の要衝である越後を治める広大な城下町を従える巨大行政府であったことを物語っています。

高田城は、朝日が昇るがごとく輝く城、高陽城という雅名をもち、また、城地の形がほら貝に似ているため螺城とも呼ばれました。約72ヘクタールの広さをもつ内郭は、本丸・二の丸・三の丸に区切られ、土塁と堀をもって固め、雄大な城を形づくっています。本丸御殿に入るには、内堀にかかる極楽橋を渡って、蹴出門(一の門)から枡形に進みます。左右の土塁にはかつての多門櫓(長屋で城壁も兼ねる兵器庫)がありました。枡形内の右手にある二層の本城御門(二の門)をくぐると、防備と美観を備えた御殿が現れます。

2 極楽橋と本丸枡形

極楽橋は、二の丸から本丸へと続く、内堀にかかる木橋です。陸軍入城時に土橋に切り替えられましたが、平成14年(2002)、発掘調査や古文書をもとに木橋に復元しました。極楽橋の先の本丸正面入口には、敵の侵入を防ぐ枡形が築かれていました。その規模は幕府の天下普請にふさわしいものです。平成26年(2014)の発掘調査では、徳川家の三葉葵紋の鬼瓦が出土しています。



外郭は、東は関川、南は百間堀・青田川、西は青田川、北は旧関川跡などに囲まれた地になっています。

高田城は、折衷式という分類に入る構造でした。本丸を中心に、その周りを二の丸で囲み、三の丸を部分的に付け足す形です。菩提が原の地を中心に、川跡を外堀に利用して内郭が出来たので、この形になりました。

内郭は、殿様の御殿のある本丸、武具蔵・火薬庫・番所などが置かれた二の丸、米蔵などがあった三の丸が、高い土塁と深い堀で区画されて造られました。天守閣は造らず、南西隅の本丸土塁上の櫓を「御三階」と称して城のシンボルとしました。

本丸の出入口は、通常出入りする本城御門(南門)、通常使用されない東不明門(東門)、北不明門(北門)の三か所あり、南門と東門は枡形でした。現在見られる西側の通路は、明治41年(1908)に土塁を切って道にしたもので、江戸時代は連続した土塁でした。外郭から本丸へは、大手橋を渡って大手門から三の丸を通り、濁堀を渡って二の丸へ出て、さらに内堀を渡って南門から入る複雑な構造でした。

コラム 松平忠輝

松平忠輝は文禄元年(1592)、徳川家康の6男として生まれ、8歳で伊達政宗の娘五郎八姫と婚約。慶長15年(1610)、堀氏に替わり越後福島城主となりました。同19年(1614)、高田城を築き入城しました。



4 鬼門

本丸北東の角は鬼門にあたることから、櫓や櫓台を設けず土塁も直線にせず屈折させました。直線的な西側土塁と対称的なつくりとなっています。土塁の高さも西側より高く、堅固な守りとなりました。



5 外堀

外堀は、高田平野最大の河川、関川の旧流路を利用して築かれました。幅は広いところで約130mもあり全国屈指の規模を誇ります。現在残っているのは城の北・西・南堀で、夏になると東洋一といわれる蓮が群生します。



6 二の丸土塁の松

西堀沿いの小山の上に「根上がり」の松がそびえます。ここは二の丸土塁の跡で、かつてその根を覆う高さまで土塁があったことを物語っています。また、かつて外堀に面して城を囲っていた土塁は陸軍入城時に削平されましたが、唯一の名残りがこの松と小山なのです。

